

まずは福島へ行きましょう！

川内村～檜葉町～郡山～南相馬で被災者と交流

新年度、新体制の下、初の福島行きは、モニタリング協定更新のため川内村と檜葉町の役場を訪れる事でした。モニタリングは、従来からの現場体制を固守する東京電力とそれを認めている政府によって初期の行動を阻まれ「行動しない行動隊」に貶められかねない私たちにとって、大事な現場行動です。

前年度末の事務所移転に手をとられて協定更新の申し入れが年度を越えてしまい、相手先に非礼とも言われかねない状態になっていたのを懸念しました。しかし檜葉町は、わたくし安藤と平井秀和さんの二人が役場に着いた4月23日の昼過ぎ、ちょうど協定更新の決済がおりたばかりでした。

川内村の方は、われわれと同じ内容の協定を結ぼうとする別団体が先廻りしていたようで、少し面倒な事態になっていました。昨年度中ほとんどモニタリング作業の申し出がなかったため、村とやや疎遠になっていたこともあるでしょう。法的手段を含め必要な手立てをとったうえで、出直すことにしました。

川内村に向かう山間の道は、東京ではとくに終わっていた桜が満開でした。鮮やかな朱色の桃の花や緑の葉と合わせた色模様は、いままで知らなかった春の姿でした。

「知らなかった」といえば、川内村が復興祭を今年からは行わなくなっていたことです。お盆時のこの行事にSVCFメンバーが毎年参加してきたのですが、「三年間」とされていた国の補助が昨年で終わったのを機に、観光客誘致等を目指して新たな「村造り事業」を企画することになったということ、猪狩貢副村長との会談のなかで知らされました。



村にゆかりの詩人、草野心平が村に寄贈した3000冊の蔵書をもとに作られた＜天山文庫＞恒例の夏行事「天山祭」（7月16日）と併せて、お盆時を含む一か月間の村内ライトアップが考えられたりしているとのことでした。

檜葉町でも、SVCFのモニタリング活動に直接関わる「放射線対策課」が、いわき市中央台の避難先役場から檜葉町鐘撞堂の本庁舎に移るという変化がありました。総務、税務、住民福祉など大部分の所管課は避難先に残ったままですが、放射線対策事業は被災地町域に近いところから、2014年6月、一足先に帰村していたのです。

この役場行きの前夜、行動隊発足時からご縁のある時事通信社の芳賀記者が福島で支局長をされているのを思い出し、支局のある福島市まで行ってきました。福島で行動隊主催の集会を開催することにつき相談するためです。行動隊の福島集会は、故・山田初代理事長がまだお元気だったころに郡山市内の避難者仮設住宅内集会所で行ったことがあるだけなのです。

東京から運転してきた安藤は、その夜の宿泊地郡山のなじみの店で夕方からいっぱい飲んでしまっていたため、白河の添田恵子さんが往復運転の労をとり、芳賀記者との話し合いに同席してくれました。自宅に帰っておられた後の、もう9時を過ぎた時間の話し合いでしたが、芳賀記者は地域開発問題などで活躍している地元女性の名をあげ、このひとに行動隊主催集会の講師につき打診してくれることになりました。

翌朝、役場に向かう車のなかで芳賀記者から「お断りだった」との連絡を受けました。＜行動隊＞という団体名が右翼や暴力集団を思わせるため、そうした団体の集会で講師を務めることは、自分の今後の活動に差し障りが出る恐れがあるとのことでした。かつての院内集会で『左翼集団』を思わせかねないから、山田さんの経歴の書き方には気をつけるように」という冗談まじりの”ご注意”を受けたことがあります。「右翼」とは！山田さんが聞いたら泣くでしょう。行動隊がいちばん肝心な福島でいかに知られていないか—わたしたちの行動の至らなさを深く反省せざるを得ません。

みなさん、「行動隊はどこへ行く？」とむづかしい議論をしているより、どんなことでもいいから福島に行きましょう。明日が見えない避難所暮らしのなかで、被災者たちがいちばん心配しているのは忘れられることです。福島に出向き現地のひとびとと接して汗を流すなかで、「どこへ行く」は自ずと分かってくるでしょう。

（安藤 博）

●第41回院内集会レポート

<ふくいち周辺環境放射線モニタリングプロジェクト>報告

4月28日(火)午前11時より午後1時まで、参議院議員会館B104号室にて41回目の院内集会を開きました。今回は<ふくいち周辺環境放射線モニタリングプロジェクト>の世話人代表の満田正さんとメンバーの中村順さん(お二人ともSVCF行動隊員)から、同プロジェクトの2年半にわたる活動について、語っていただきました。

はじめに満田さんから、生活空間に関わる汚染地点の綿密な放射線モニタリングを目的とする、同プロジェクトの趣意について説明があったあと、中村さんからほぼ1時間にわたり、結成以来18回に及ぶ具体的な活動の報告を、現場の状況を描いた動画をまじえて紹介されました。

いまや南相馬市を中心に多数の自治体の放射性物質の汚染地点を調査した同プロジェクトが、工夫を重ねてノウハウを蓄積してゆく過程に、約30名の参加者は深い感銘を受けました。

行政が行う粗い調査に比べ、約50mのメッシュでモニタリングを重ねる同プロジェクトの調査データは、今年の1月に特定避難勧奨地点の解除を行った国の暴挙に対する南相馬市住民による提訴にも、一役買うのではないかと思います。

なお、今回も牧山ひろえ参院議員(民主党)からご挨拶を受けたほか、荒井広幸参院議員(新党改革)と階猛衆院議員(民主党)の秘書の方々が来場されました。(平井吉夫)



左から満田正さん、中村順さん、牧山ひろえ議員

<次回：第42回院内集会のご案内>

- 日 時：5月28日(木曜) 11:00-13:00 (10:30から受付開始)
- 会 場：参議院議員会館地下一階 B102号室
- 講 演：「原発事故被災地の現状と課題」
- 講演者：北村俊郎さん(元日本原子力発電株式会社社員、福島県須賀川市在住)

とらわれのない視点

北村俊郎さんのお名前は、ご著書『原発推進者の無念』や連続エッセイ「福島だより」で二年ほど前から存じ上げていましたが、お会いするのは次回院内集会(5/28)の講師をお願いに行ったこの四月が初めてです。

前回の院内集会で講師を務められた満田正さん、中村順さんの<ふくいち周辺環境放射線モニタリングプロジェクト>に参加するため、<行動隊>の平井秀和さんと南相馬市に向かう途上、北村さんのお住まいのある須賀川市に立ち寄り、1時間あまりお話ししました。

こちらからは、<行動隊>立ち上げの主旨、国政・国会とのつながりを求めて院内集会に力を入れていること等をお話しし、5月集会講師を快諾していただきました。

原発被災者地の現状等について北村さんが興味深い話しをされたなかで印象的だったのは、とらわれのない、自由な広い視点でした。原発についてもそうです。ご著書の副題は「避難所生活で考え直したこと」で、表紙の帯には「私はもう、原発が『安全』とは言えない。」とあります。

しかし、「脱」「反」の主義を掲げるようなことはされていません。

お会いする前にお送りいただいたエッセイ「被災地からメディアへ望むこと」(日本新聞協会刊行誌『新聞研究』2015/3/13)には「原発推進、反対の二項対立が続き、現実の安全が疎かにされ大事故は起きた。(中略)結論ありきの報道は二項対立の溝を深くするものでしかない。」と記されています。

<行動隊>の原発に関する基本姿勢に、一脈通ずるところがあるのを感じました。(安藤博)



平凡社新書 定価=780円(税別)